様式1 令和3年度　山梨県立富士見支援学校評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

学校目標・経営方針	児童生徒たちの病状に配慮し、健康の回復を図りながら、義務教育における学習空白を補完するとともに、社会の中で人と関わりながら生きていくための力を育む

山梨県立富士見支援学校校長　小倉正一

本年度の重点目標	
	1　児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。
	2　健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。
	3　病弱教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。

達成度		
	A	ほぼ達成できた。（8割以上）
	B	概ね達成できた。（6割以上）
	C	不十分である。（4割以上）
	D	達成できなかった。（4割以下）

評価	
4	良くできている。
3	できている。
2	あまりできていない。
1	できていない。

自　己　評　価

本年度の重点目標				年度末評価（3月17日現在）			学校関係者評価 実施日 （令和4年2月18日）	
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策	評価	意見・要望等
1	児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。	個別の指導計画に基づいた学習の状況や結果を適切に評価し、教科間でのカリキュラムマネジメントを行いながら指導の改善を図る。 ICT教材の活用や体験的活動など、指導法を工夫することにより、わかる喜びを実感できる授業を行い、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証（満足度80%）	・個別の指導計画については、学期毎にPDCAのサイクルで検証を繰り返し、指導の改善を図っていくことができた。また、各教科間で情報交換を行い、教科横断的な指導を展開することを意識して取り組むことができた。 ・一人一実践を中心の校内研究活動、 複数の研修会の実施などにより、児童生徒の実態に配慮したICT機器を活用した授業を蓄積していくことができた。【研究】 ・学習内容をより有効に理解させるために、ICT機器を適切に扱えるよう基礎的な研修を行ったことで、適宜授業内で利用することができた。視覚的、体験的、または補助的な活用をすることで、授業内容の理解の促進につなげることができた。	A	・小中学部共に新学習指導要領に移行していることも踏まえ、PDCAによる指導改善のサイクルを繰り返しながら、より質の高い教科横断的な学習指導ができるよう取り組む。また、在籍する子どもの実態に即した授業計画を行う。 ・2か年の県指定研究の継続、研修会の実施などにおいて、わかる喜びと学習意欲につながるICT機器を活用した授業をめざす。【研究】 ・ICT機器を使うことを目的とせず、ICT機器を利用することで、授業の質的な向上が図れるよう、基礎的な研修を繰り返し、様々な利用の仕方を学ぶ。また、教職員間で情報を共有し、授業内容の理解を促すより良い活用の仕方を模索する。	4	・学校生活では、行事なども含めて児童生徒が意欲的に段階的に学べるように、また、児童生徒の学習進度に寄り添った指導の様子が伺える。 ・コロナ禍になり、リモートでの話し合いの機会が増えてきた。保護者や関係機関ともリモートでのつながりで広がりが持てるような取り組みも期待できるのではないか。 ・教師間の連携はとても重要である。評価は高い数値結果であったが、今後も引き続き良好な関係作りが継続できるように努めていってほしい。 ・GIGAスクールが始まり、ICT教育も進んできた。活用がさらに広がることが大切である。児童生徒の情報活用能力の向上がみられるDVD作品や発表の様子を見ることができて本当によくわかった。 ・高等部が無いことを課題と捉えていたが、インクルーシブ教育の流れや思春期の発症に多さを考えると現状でも十分に機能することが期待できる。今後も病弱特別支援学校への周知を図り、支援のシステムをわかりやすく工夫していくことがよいのではないか。 ・病類の変化は割合だけでなく、実数も併記したほうがよい。 ・コロナ禍ですが、体験型の学習を重視した活動をしていただき、貴重な経験になっている。 ・日々教育の改善に取り組んでいるので病院との連携もしやすい。
2	健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、自立を目指す態度を育成する。	教育課程に児童生徒の心身の状態を考慮した系統的・体系的なキャリア教育を位置づけ、その充実を図る。 道徳教育や保健教育と関連させ学校生活全体を通して、自他を大切にする心を育て、基本的な生活習慣を身につけさせる。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証（満足度80%）	・本年度も児童生徒の実態把握を丁寧に行い、身につけさせたい力を教師間で確認し、進路指導年間計画も参考にしながら、支援方法を検討・実施できた。 ・年度の早い段階から中学部2年生が職場体験学習を計画し、事前学習や、受け入れ先との打ち合わせ等を重ねてきた。しかし、実施間際になり新型コロナ新規感染者が増加したため、延期となった。引き続き学習を深め、実施に備えたい。他の児童生徒においても例年通り、進路指導年間計画を参考に実態に合った指導を行った。 ・保健体育の授業や特別活動を通して心身の状況把握や課題に向けた取り組みができた。また、登校時の健康観察を通して、担任と協力して保健指導を行うことができた。・Formsを、教員のみならず一部の生徒の健康管理に活用することができた。 ・地域のコロナ感染レベルに合わせて予防対策を強化した。それに伴い、感染予防対策機器を充実させることができた。	A	・来年度も各児童生徒の的確な実態把握を行うと共に、教師間での共通理解を丁寧に行い、適切な支援を検討する。 ・本年度延期になっている職場体験学習を実施可能になり次第行う。 ・新中学部2年生についても、職場体験学習を可能な限り、計画し実施につなげる。 ・コロナ感染症に関連し、校外での学習等が実施できない場合も想定して、学習内容を計画し、さらにキャリア教育の充実を図れるようにする。 ・医療や保護者と密に連携し、心身の状況を把握・調整しながら行う学習活動を今後も計画的・継続的に行い、さらなる充実を図る。	3	・摂食障害のお子さんが増えてきている。分校で研修会を行い、本校でも資料等を共有することができた。 ・北病院では性教育のプログラムを実施するようになった。大変好評であり正しい知識を知らないために、SNSを使って画像や関係づくりなどの影響を受けている児童生徒の割合が高くなってきている。正しい教育を知ることで未然に防げることも多くなっているので、今後も続けていきたいと考えている。参考にしてほしい。 ・文科省はいじめはあってはならないと言っているが、いじめではないが人と繋がりあうときには衝突も学びの一つの過程であると思う。その経験は社会性を育み人としての自立につながると思うので、大きくとらえていくことも大切である。 ・本校はいじめがなくスムーズに指導が行えていることがわかった。 ・虐待を受けているお子さんは集団に馴染めないケースにつながっていく。家庭での療育環境を整えていってほしい。本校の児童生徒は大丈夫であると思う。 ・安心できる人とかかわるとても良い機会になっている。 ・勉強面も生活面も細やかな対応をしてくださっている。 ・特性や家庭環境に影響される子どもたちが多いので、個々の対応は大変だと思う。先生方が間に入ってくださるのでいじめなど未然に防げていると感じている。
3	病弱教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。	積極的な情報発信を行い、病弱教育への理解と啓発に努めるとともに、関係機関との連携を充実させる。 「高校生こころのサポートルーム活用事業」について、関係機関及び高等学校との連携をさらに深め、専門家の助言を受けながら相談支援の充実に努める。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証（満足度80%）	・HPでは常に最新の情報を更新し、ブログを通じて保護者への緊急連絡やタイムリーな情報発信に努めることができた。 ・指定地域への支援は、子どもの利益を尊重できるよう、関係機関と連携しながら、センター的機能の発揮に努めた。 ・病弱連携会議では、講演会や情報交換会を通して、会員の病弱教育の専門性向上を目的に運営した結果、高い評価を得ることができた。 ・専門家の助言を受けながらのニーズに沿った支援は、来談者の来室への意欲につながり、引きこもりの予防や無気力の改善に寄与した。 ・対応に困っている保護者や高校からの信頼を得ることができた。 ・転籍後の後支援は、生徒が焦らずに新しい環境に適応できるよう支援することができた。 ・高校生を持つ保護者や関係機関からの電話相談には、困りの改善の糸口が見つかるよう、アドバイスやコーディネートに努めた。	A	・HPではとくにブログの内容の充実を図り、保護者等への緊急連絡や最新の情報の発信にさらに活用していきたい。 ・指定地域への支援は、困難ケースが多いため、実効的な多職種連携を行えるよう、関係機関との連携を強化する。　・病弱学級が年々増加し、連携会議への多様なニーズに応えるため、今後はさらに市町村教育委員会との連携を充実していく。　・高校と連携して困っている生徒の支援に当たれるよう高校の理解を得るためには、様々な機会を通して、地道に周知に取り組む必要がある。 ・生徒と保護者、学校の困りに対しては、これからも迅速で適切で丁寧な初動対応を強化する必要がある。	3	・医療との連携の部分で、本校は自宅に戻り、分校は病院に戻るということが児童生徒への指導の違いにつながるのではないか。 ・高等部になってからの進路指導で病弱であることが課題になるケースもある。早期の対応やそのことへの自己理解と合理的配慮の検討が進むことを望む。 ・高校生のこころのサポートルームを行うことで教職員の資質向上につながっている。様々なケースがあるが、教職員に周知を図り、幅広い対応の力を育てていってほしい。 ・保護者同士や地域との関係づくり、関係機関との連携は児童生徒の特性もあり、難しいことがわかる。HPや学校だよりなども活用してできる範囲で情報発信に努め、富士見支援の理解を広めてもらう取り組みに期待する。 ・SCによる相談がうまくいかなかった原因の共有を図り、効果的に機能する方法を検討することも必要である。 ・出生数が減少する一方で、治療が進歩し学校へ通える程度まで治る児童生徒が増えているので、病弱児はさらに増えていくと思う。高校に進学後は学校と医療とのコミュニケーションは急激に低下することを実感する。病弱児の問題を今後も共有してきましょう。 ・高校生のサポートのできる機関は非常に少ないので、もう少しこのような活動が広がっていくとよいと感じている。
4	多忙化の改善を図り、効率的な学校運営を目指していく。	児童生徒・保護者・関係機関等との対応における時間外勤務の振り替えを適切に行うことにより、教職員の多忙化・多忙感の解消に努める、	教職員アンケートによる検証	多忙化改善アクションシートに沿って実施。 ・時間外勤務の振替が効果的に活用された。 ・定時退庁日や勤務時間の調査は全体的な数値が改善の方向に向かっている。 ・行事精選や業務改善については、様々な場面で話題に上がり、必要性を鑑みての実施の姿勢が身についてきているように感じる。 ・会議時間の短縮を目指して、感染対策も含めて事前の共有化を図る機会を提供したり、司会と提案者が事前に打ち合わせを行って取り組んでいる。	B	・現在行ってきている多忙化に関する取り組みは今後も継続していくことが必要であると考える。 ・組織全体で多忙化改善の取り組みへの意識の高揚が持続していけるよう取り組んでいく。 ・来年度は学校閉庁日を増やし、職員の勤務時間を可能な範囲で縮小する。 ・業務改善や学校行事の精選なども継続して取り組んでいく。	3	・働き方改革など多忙を解消する取り組みは教職員のワークライフバランスを整え、教育の充実につながっていくとても大切な取り組みである。 ・ICTを活用した業務改善も進んでいるので、オンラインでの研修会や学びの場づくりを広げ、負担のない職場環境の充実につなげていってほしい。

留意点 （1）重点目標と評価項目については，各学校の現状と課題に基づき，実情に合わせて重点化し，設定する。
（2）学校関係者評価については，年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し，評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは，最終回の学校評価委員会等を開催し，学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。